

# 「偏見」に関する社会心理学的研究の動向<sup>1)</sup>

## —これまでの研究成果と今後の展望—

中 村 真

A Review of Social-psychological Study on Prejudice

Shin NAKAMURA

Key Words: 集団, 偏見, 社会的カテゴリー化, ステレオタイプ, 認知過程

### はじめに

国際化が急速に進展する現代社会において、その解決が急がれる大きな問題のひとつに「偏見」が挙げられる。Allport(1954)の定義によると、“偏見とは、ある人がある集団に所属していると、その集団が持つ好ましくない性質をその人も持つという理由で、その人に抱く嫌悪の態度、または敵意である”としている。また、Pettigrew, Fredrickson, Glazer & Ueda(1980)は、“不合理な原因によって、ある集団やそのメンバーに対して持つ非好意的な態度”としている。さらに、東(1994)は、“ある種の人間や社会に対して、事実に即して認知し、判断するのではなく、予断や先入観によって、否定的、非好意的な態度や信念を抱くこと”と定義している。これらを総合的に判断し、本稿では、「偏見」を“個人が特定の集団あるいはそのメンバーに対して、事実に即して判断するのではなく、予断や先入観によって抱く否定的感情または拒否的態度”と定義する。言うまでもなく、「偏見」は、人間社会のさまざまな領域や場面に数多く存在し、それによって、集団間の相互交流が妨げられたり、異なる集団メンバー間の対立や葛藤が生じている。また、それらが過激な形となって行動に至ったのが「差別」である。心理学者は、古くからこの「偏見」の問題に注目し、その発生起序の解明に努めてきた。彼らの長年に渡る研鑽によってその知見は多岐に及んでおり、次第に、「偏見」の実態およびメカニズムが解明されつつある。

本稿では、まず、これまでの心理学、特に社会心理学における「偏見」研究の所産を概観し

た後に<sup>\*</sup>、近年、注目されつつある認知社会心理学的な視点に立った研究の成果を述べる。さらに、筆者の観点から、今後の「偏見」研究の展望を論じる。

### 心理学諸理論による「偏見」へのアプローチ

「偏見」の形成要因に関しては、これまで、多くの心理学者がそれぞれの視点で説明を試みてきた。さまざまな知見が得られているが、ここでは、それらをより包括的にとらえるために、心理学諸理論による見解をまとめた。

社会的学習理論に立脚した説明によると、「偏見」は、生まれながらにして持たれるものではなく、子どもが社会化の過程において獲得した規範や価値観の中に含まれるものであるという(川端, 1993)。子どもは、親や周囲の人たち、あるいはマスメディアなどが特定の集団に対してとったそのような態度を次第に学習し、それを自らの思考・行動の枠組みとして確立する。

一方で、「偏見」の原因を個人の特定のパーソナリティに求める研究も多い。Adorno, Frenkel-Brunswick, Levinson & Sanford(1950)は、ある集団(民族)に偏見を持つ個人は他の少数派集団に対しても偏見を持つ傾向があるという調査結果から、「権威主義的パーソナリティ(authoritarian personality)」の存在を唱えている。また、こういった特性をもつ人ほど、物事を白黒に二分して考えがちで、思考に融通性がなく、政治や経済に対する考え方も保守的で、ファシスト的でさえあるという。同様な見解は、近年の研究(Altemeyer, 1981; Weigel & Howes, 1985)においても見られ、さまざまな集団に対する偏見が、権威主義によって予測されることを明らかにしている。

さらに、精神力動過程に原因を求める立場もある。そこでは、「偏見」は人々の怒りや攻撃性が置き換えたもの、あるいは、自己の欲望や否定的な特性が投射されたもの、などといった自我防衛機能によるものであるとしている(Ashmore & Del Boca, 1976; Harding, Kutner, Proshansky & Chein, 1954 ; 川端, 1993)。戦争等によって社会不安が生じたときに、少数派集団や外国人に対する偏見・差別が増すのは、このような事由によるところが大きい。

Levine & Campbell(1972)は、「現実的葛藤理論(realistic group conflict theory)」において、「偏見」が集団間葛藤によって生じることを説明した。それによると、ある2つの集団が共通の目標に向かって競い合っているとき、その2集団は互いに脅威を与えあう。その脅威は、相手集団に対する敵意を生み、非好意的な態度を促すという。Sherif, White, Hood & Sherif(1961)は、少年のサマーキャンプ場面を用いてこれを実証している。そこでは、無作為に2つの集団

## 「偏見」に関する社会心理学的研究の動向

に分けられた少年たちが、団体競技の勝敗などを通して、次第に外集団メンバーに対して非好意的に振る舞うようになったと報告している。

人間には、自己の能力や意見を正当に評価したいという動因があり、それを満たすために、自分と同等な他者との比較によって自己を評価するという傾向がある。Festinger(1954)は、これを「社会的比較」と呼んだ。個人のこのような傾向は、集団間場面にも適用できるのではないだろうか。すなわち、先に述べた「集団間葛藤」は、規模や能力が同等で比較的身近な集団間において生じていることから、それが、所属集団の評価を行うため(あるいは、それによって自己を正当に評価するため)の集団間比較に端を発しているとも解釈できよう。

## 「偏見」に関する社会心理学的知見

### 1) 「社会的カテゴリー化」による偏見の形成

我々は、物事を効率よく認識するために「カテゴリー化(分化：categorization)」と呼ばれる方略を用いている。それによって、目の前に広がる無数の情報に溺れることなく、安定し秩序だった認知的世界を構築することが可能となる。例えば、地球上で生きているモノを考える際に、我々は、まず、それらを総称した「生き物カテゴリー」を、さらにそれを大きく二分した「動物カテゴリー」および「植物カテゴリー」という分化を行うことがある。これらは目的に応じて細分化されていくだろう。しかし、時には、その生物が自己にとって有益か否かという観点で分けられる場合もある。「敵カテゴリー」、「味方カテゴリー」などがこれに相当する。このように、分化の基準が自己と関連したり、何らかの社会的色彩を帯びる場合のカテゴリー化を「社会的カテゴリー化(social categorization)」と呼ぶ。その中でも、最も基本的な次元とされるのが、自分を含む集団(内集団：in-group)と含まない集団(外集団：out-group)の区別である(村田, 1991)。

いわゆる、<ウチーソト>の区分は、人類が長い間集落生活を営んできたために生じたものであり、集落内で共に生活する仲間とそうでない異人とのあいだにある歴然とした差異、または境界がその分化を促した原因であると考えられる。そういう認知傾向は、古代人ほどではないにしても、現代に生きる我々にも残っている。

近年、この<内集団ー外集団>というカテゴリー化にともなって認知的なバイアスが生じることを実験的に検証した研究がある。Tajfel, Billig, Bundy & Flament(1971)は、「最小集団関係状況(minimal intergroup situation)」という手法を用いて、我々が何らかの単純な基準によ

って内集団と外集団に分けられた場合でさえも、「内集団偏好(in-group favoritism)」と「外集団拒否(out-group rejection)」が生じることを実証した。これは、報酬分配課題において、外集団よりも内集団のメンバーに対して多くの報酬が与えられるという実験結果によって示されたもので、それまで相互作用がなかった他人でさえも、ひとたび内集団メンバーのカテゴリーに入ると、このように好意的に扱われたり、高い評価を得るという。逆に、外集団メンバーは、低く評価されるとともに前者よりも非好意的な、ときには、拒否的な扱いを受ける。

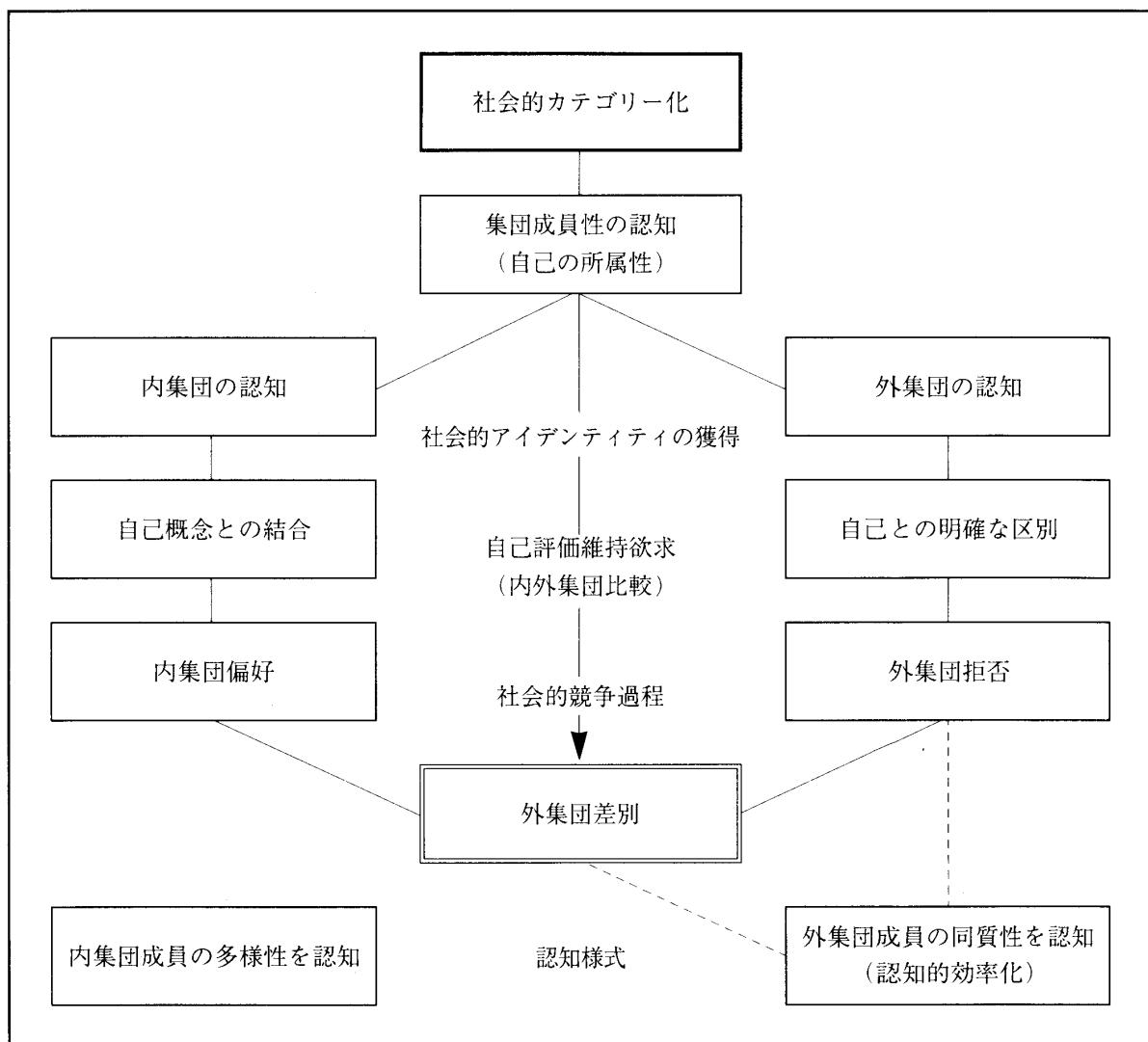


Fig. 1 社会的カテゴリー化による内、外集団の認知(筆者による仮想図)

## 「偏見」に関する社会心理学的研究の動向

このような事態は、「社会的アイデンティティ理論(social identity theory)」によって説明される(Tajfel, 1981; Tajfel, 1982; Tajfel & Turner, 1979)。それによると、所属集団の特性は、そのメンバー個々の自己概念の一部であるという。したがって、我々は自尊心(self-esteem)を維持し、自己評価を高めるために内集団の他のメンバーに対してポジティブに評価したり、好意的な態度をとるのである。そのためには、内集団と対立する外集団のメンバーを蔑んだり、ネガティブに評価することも辞さない(Fig. 1 参照)。そういう傾向は、個人が内集団に所属しているという意識が高いほど強くなり、ときには、「エスノセントリズム(ethnocentrism：自集団中心主義)」という強固な思想に至ることもある。人種・民族間紛争やヨーロッパや南米で時折見られるサッカー観戦者の乱闘事件などは、彼らの意識の中で揺れ動く「社会的アイデンティティ」とは決して無縁ではないだろう。特に、人種・民族間紛争は、世代を越えて受け継がれていることが多い、それを抑止するために内一外集団の境界を取り払い、相互理解を促すことは容易ではない。

### 2) 「ステレオタイプ」による偏見の形成

これらに加えて、近年では、社会的認知の研究成果に基づいて「偏見」の形成過程を解明しようとする試みが盛んである。そこでは、「偏見」を“ネガティブなステレオタイプに基づいて形成された、集団やそのメンバーに対する否定的な態度”と捉えている。ここで言う「ステレオタイプ」とは、人種、民族、職業といったさまざまなカテゴリーによって区分される集団やそのメンバーについて我々が持っている固定化された知識のことである。それは、個人の直接経験や代理学習に基づいて形成されたものであり、Fig. 2 に示すような階層的ネットワーク構造をなしていると考えられる(Stephan, 1989)。ステレオタイプに基づく認知は、この模式図を用いて説明される。すなわち、地位や性別などの特定の情報が与えられて上位のカテゴリーノードが活性化すると、それに連鎖したノードへのアクセシビリティ(接近性：accessibility)が高まり、下位ノード(地位や性別に応じた特性)が活性化する。つまり、ネットワーク経路に基づいた情報処理(予期・推論)が行われやすくなる。

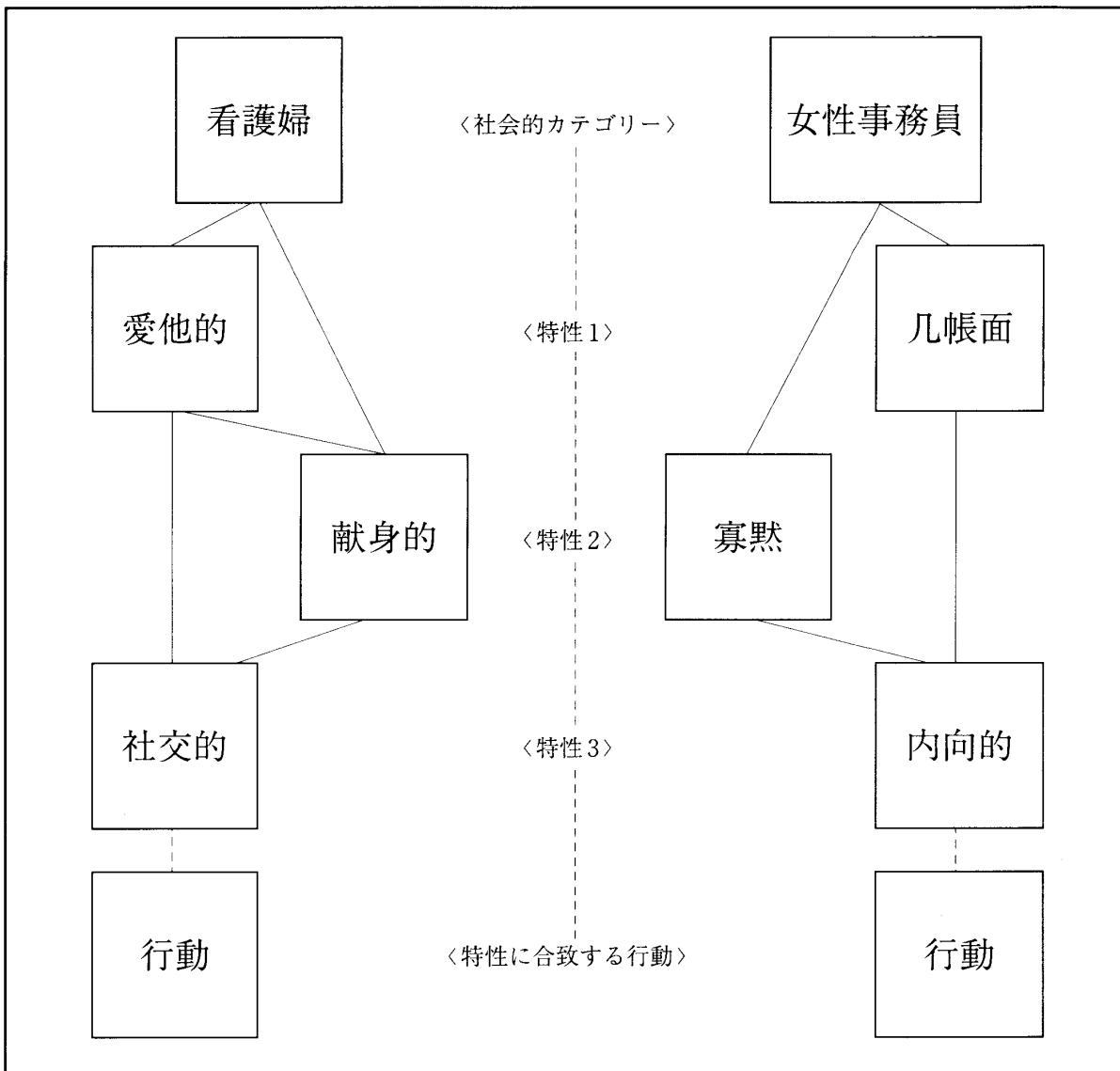


Fig. 2 スtereオタイプの階層的ネットワーク構造(筆者による仮想図)

研究者によっては、「ステレオタイプ」を、先に述べたようなその機能的側面を含めて、「スキーマ(schema)」、「プロトタイプ(prototype)」などと呼ぶこともある。ここまで見てきたように、概して、ステレオタイプ的な認知は、トップダウン処理が優勢である。つまり、ステレオタイプに整合するように情報が修正して捉えられたり(Snyder & Uranowitz, 1978), 処理した情報の中でもステレオタイプに合致するものはよく記憶されるが、そうでないものについては想起されにくい(Cohen, 1981)といった認知的バイアスが起こる。例えば、認知の対象となる者(女性)が、ある集団(看護婦)に属すると告げられた場合、認知者は、当該個人に関する情

## 「偏見」に関する社会心理学的研究の動向

報が曖昧なものであっても、彼女にその集団の一般的特性(献身的)を当てはめてしまう。また、集団の特性(愛他的)に合致する情報(思いやり)は、よく記憶されるが、そうでない情報(几帳面さ)は記憶されにくい。

とはいって、「ステレオタイプ」には、我々が自己を取り巻く無数の情報(環境)を安定して、なおかつ効率的に処理するための機能的役割がある。これによって、人は目まぐるしく変化する環境に適応することができると言っても過言ではない。Lippmann(1922)は、これを称して“ステレオタイプの<思考の節約>機能”と呼んでいる。しかしながら、それは必ずしも現実を正確に反映するとは限らない。実際、雑多な情報を全てありのままに受けとめていては、我々の生活は成り立たないし、現実には不可能でもある。したがって、情報が複雑で難解な場合や時間的に切迫している状況では、この固定的で紋切り型の、しかも認知的負担が少なくてすむ処理方略による推論や判断が行われやすい。

要約すると、「ステレオタイプ」は、一方で、人間の認知活動を合理的かつ適応の目的に沿ったものにするという重要な働きを担っている。しかし、他方では、情報を詳しく検討することなく、認知者の個人的経験(ステレオタイプ)に基づいて処理した結果、事実を著しく歪曲して捉えさせてしまうというような、あまり好ましくない側面も兼ね備えている。言うまでもなく、そういう機能が、直接的・間接的に「偏見」や「差別」の原因になっていると考えられる。Devine, Hamilton & Ostrom(1994)は、「ステレオタイプ」が情報処理に及ぼす影響を次のようにまとめている。すなわち、①ステレオタイプに基づく認知によって、特定の情報に注意が向きやすくなる(選択的認知), ②情報をステレオタイプに適合した特定の意味に修正して、解釈してしまう(情報の歪曲), ③処理された情報に基づいて他の集団のメンバーと相互作用する際の行動様式が規定される。また、ステレオタイプが強固であるほど、こうした影響を無意識に、いわば自動化された状態で受けやすく(上瀬, 1992), その解消が難しくなると思われる。

### <外集団同質性の認知>

我々が集団を認知する際に、「内集団」と「外集団」に分けて認知しやすいということは先に述べた通りである。村田(1991)は、我々が内集団と外集団とに対して、異なる認知様式を発達させてきたのではないかと推察している。すなわち、内集団のメンバーに関しては一人一人の違いをよく認知する。これに対して自分を含まない外集団に対しては、個々のメンバーの多様性を認知することが難しいとされる。Park & Rothbart(1982)は、男性-女性間でこれを実証した。それによると、女性の集団がどの程度「男性的」性質を有しているかの評定は、女性

自身のほうが男性よりも高かった。また、女性集団がどの程度「女性的」性質を有しているかの評定は、女性自身よりも男性のほうが高い。また、男性集団に対する評定パターンは、女性集団に対するそれとはちょうど逆であった。これらの結果を要約すると、外集団メンバーは同質に見られ、内集団メンバーに関する認知は多様であると言える。このような傾向は、これまで述べてきたように、我々が認知的効率化の目的から、外集団を簡略化して捉えようとすることを示すものであると同時に、外集団に対して「偏見」につながるようなステレオタイプが形成されやすいことをも示すものである(Fig. 1 参照)。

### 情報処理過程における「偏見」の形成

ここまででは、社会的認知の研究において明らかにされた「偏見」の形成因として、「社会的カテゴリー化」および「ステレオタイプ」をとり上げ、そのしくみについて概観してきた。ただし、それらはある程度の学習を基に成立するものであり、認知者個人の過去経験や文化的背景と独立して存在するものではない。したがって、このような観点から「偏見」の問題に取り組む場合は、認知者の個人差を十分に考慮する必要があると思われる。

一方で、近年、純粹に人間の情報処理過程に伴って生じる認知的バイアスに焦点を当てた研究がみられる。例えば、目立ちやすい情報は利用されやすく、他の情報を慎重に処理せずに、時には、全く吟味せずにその情報のみから情報の全体像を把握したつもりにさせてしまうという現象がある。この直感的な情報処理方略は、「利用可能性ヒューリスティック(速断傾向)」(Tversky & Kahneman, 1974)とも呼ばれ、これによって、我々は、しばしば、“数少ない情報から過度の一般化を行う”という過ちを犯してしまう。

例えば、“あるメーカーの製品のごく一部に重大な欠陥が見つかったとき、我々は往々にして、それ以降、詳しく吟味することなく、そのメーカーやそこで造られた他の製品に、牽いては、そこで勤める社員にまでも欠陥品によって活性化された特性を付与してしまう”というような場合がこれに相当する。

このような、情報処理過程にともなって生じる認知的バイアスを実証的に示したのが、Hamilton & Gifford(1976)の研究である。彼らは、「誤った関連づけ(illusory correlation)」による認知を提唱し「小集団」と「その成員による希な行動」の組み合わせが歪曲化された認知を生むことを実験的に検証した。それによると、希な属性の対は、頻度が少ないが故に、目立ちやすくなり、その特徴が過大視されるという。彼らの実験では、被験者は、「視覚情報の処理に関する実験」であるという教示を受けた後に、A集団、または、B集団に所属する人物の

## 「偏見」に関する社会心理学的研究の動向

行動が記述されたスライドを見せられた。A集団、B集団に所属する人物の人数は、それぞれ26人と13人であった。また、2つの集団メンバーの中には、望ましい行動をした者と望ましくない行動をした者がそれぞれ9：4の割合で含まれていた。すべての人物の行動記述が提示された後、被験者は、2つの集団について、それぞれ望ましい行動をしたメンバー数と望ましくない行動を行ったメンバー数を推定するよう求められる。また、2つの集団についてそれぞれ印象評定も行われた。その結果は、Table 1にも示してある通り、少数集団の望ましくない行動が、実際よりもかなり多く見積もられていることが分かる。これは、両属性の「目立ちやすさ」によって引き起こされた過大視であるとされている。また、印象評定もこれと呼応して、少数集団が多数派集団よりもネガティブに評価された。これは、我々が学習経験によらずに、単に情報を処理する過程において、マイノリティに偏見を抱いてしまう可能性があることを示唆している。

Table 1 集団に帰属された行動の数(平均)

行動のタイプ	A集団(多数派集団)	B集団(少数派集団)
望ましい行動	17.52(18)	9.48(9)
望ましくない行動	5.79(8)	6.21(4)
()内は理論値 (Hamilton, D. L. & Gifford, R. K., 1976 より作成)		

しかし、その後の追試研究では、行動の頻度に関わりなく、「大集団」と「望ましい行動」および「小集団」と「望ましくない行動」の組み合わせを認知者が多く見積もること(白井, 1979; 杉森, 1990), また、集団の印象が大集団では望ましい方に、小集団では望ましくない方に偏向することが見いだされた(白井, 1979 ; 杉森, 1990)。杉森(1990, 1993)は、前者をポジティビティバイアス効果、後者をネガティビティバイアス効果と呼んで、認知過程による偏見の新たな枠組みの可能性を示唆した。これを受けて、中村・佐藤(1994a)は、集団サイズによってもたらされる認知的バイアスを検討している。そこでは、行動の望ましさは等しいが、サイズが異なる集団を4水準設定し、Hamilton & Gifford(1976)の研究パラダイムに準じた実験が行われた。その結果、大集団ほど望ましい行動をしたメンバー数が多く推定されやすいこと、また、印象評定は、大集団で望ましく、小集団で否定的になることが示された。中村(投稿中)は、当初、このような事態を、“人は同じ刺激に繰り返し接すると、その刺激に対する親和性が生まれ、魅力が生じるという(Zajonc, 1968)”, いわゆる「単純接触効果(mere exposure effect)」と呼んでいた。

sure effect)」によって説明しようと試みた。しかし、この結果は、集団メンバー数が倍であることを除いて全く同じ条件で行われた実験(中村・佐藤, 1994 b)においても追認されていることから、新たに、「相対的接触効果」の可能性を提唱している。すなわち、人は、集団情報を処理する際に、集団サイズのみならず、当座の複数集団間の相対的なサイズに基づいて、大集団をポジティブに、小集団をネガティブに認知する傾向があることを示唆している(中村, 投稿中)。

このように、集団サイズと「偏見」の関係については、研究者間において必ずしも一貫した見解がもたらされておらず、追試研究を含めた多くのアプローチが期待されるところである。また、認知過程にともなって生じる「偏見」に関しては、従来から、その研究成果の一般性を疑問視する声が聞かれる。確かに、少数の実験室実験、あるいは仮想集団を用いた実験の結果をもって、即、それを人間の一般的傾向と決めつけるには無理があるかもしれない。しかし、ある事象を探求しようと試みる場合、その達成は、さまざまな立場からの、多くの研究者の努力とその積み重ねによるところが大きく、「偏見」研究もその例外ではない。これらの研究が、「偏見」の解明とその抑止に大きく貢献することを期待したい。

### 今後の「偏見」研究の展望

本稿では、「偏見」の形成要因に関する心理学の主な研究成果を概観した。また、社会心理学における「社会的カテゴリー化」と「ステレオタイプ」の研究に着目して「偏見」の形成過程を詳細に検討している。以下では、このレビューを通して筆者が考えた今後の「偏見」研究の展望をまとめる。

第一に、これまで概観してきたように「偏見」は、さまざまな要因によって形成されることが明らかになっている。今後は、これらの要因を個別に検討することに加えて、それらが相互に関連しあって「偏見」が形成される(あるいは促進される)ことを反映するような研究が望まれる。

第二に、「偏見」の形成過程を検討する際に、これまで個人に焦点をあてた研究が多かったが、今後は「同調行動」などに代表されるような「集団力学」に着目することによって、実際に偏見が普遍化するプロセス等も検討すべきであろう。

第三に、倫理面を考慮した研究(特に実験研究)が望まれる。古典的な研究では、ややもすると、実験そのものが「偏見」を生み、促進してしまうという懸念があった。被験者に対する実験後のフィードバックを含めた慎重な研究計画が必要である。

## 「偏見」に関する社会心理学的研究の動向

第四に、「偏見」の形成過程のみならず、社会への還元を念頭において、「偏見」の抑止のための研究成果を期待したい。

## 終わりに

冒頭でも触れたように、国家間の交流がますます盛んになるであろう、21世紀に向けて、「偏見」の解明と抑止は、心理学者に与えられた大きな命題である。筆者も微力ながらその研究に貢献できるよう力を注ぐ所存である。また、紙面の都合により、本稿において触れることができなかった研究が多数あった。それらについての検討は、後の稿に譲ることしたい。

末筆ながら、本紀要への執筆をすすめてくださった川村学園女子大学心理学科の田中 裕先生に感謝の意を表する。

## 注

- 1) 本稿の執筆にあたり、東京都立大学人文学部教授の加藤義明先生にご指導を賜りました。記して感謝いたします。

## 文 献

- Adorno, T. W., Frenkel-Brunswick, E., Levinson, D. J. & Sanford, R. N. 1950 *The Authoritarian Personality*. New York: Harper & Row.
- Allport, G. W. 1954 *The Nature of Prejudice*. Addison-Wesley.
- Altemeyer, B. 1981 *Right-Wing authoritarianism*. Winnipeg: University of Manitoba Press.
- Ashmore, R. D., & Del Boca, F. K. 1976 Psychological approaches to understanding intergroup conflict. In P. Katz (Ed.), *Towards the elimination of racism* 73–123. New York: Pergamon.
- 東 清和 1994 「偏見」 古畑和孝(編) 社会心理学小事典 有斐閣
- Cohen, C. E. 1981 Person Categories and Social Perception: Testing some Boundaries of the Processing Effects of Prior Knowledge. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 441–452.
- Devine, P. G., Hamilton, D. L. & Ostrom 1994 Social Cognition: *Impact on Social Psychology*. Academic Press.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117–140.
- Hamilton, D. L. & Gifford, R. K. 1976 Illusory correlation in interpersonal perception: A cognitive basis of stereotypic judgments. *Journal of Experimental Social Psychology*, 12, 392–407.
- Harding, J., Kutner, B., Proshansky, H., & Chein, I. 1954 Prejudice and ethnic relations. In G. Lindzey (Ed.), *The Handbook of Social Psychology*. Vol. 2 1021–1061. Cambridge, MA: Addison-Wesley.
- 上瀬由美子 1992 血液型から人を見る 松井 豊(編) 対人心理学の最前線 103–110 サイエンス社
- 川端美樹 1993 偏見と差別 今城周造(編) 社会心理学 日常生活から学ぶ 北大路書房
- Levine, R. A., & Campbell, D. T. 1972 *Ethnocentrism: Theories of conflict, ethnic attitudes and group behavior*.

- New York: Wiley.
- Lipmann, W. 1922 *Public Opinion*. Macmillan. 田中靖政・高根正昭・林 進(訳) 1963. 世論世界大思想全集 社会・宗教・科学思想編 25 河出書房新社
- 村田光二 1991 働く知識 池田謙一・村田光二(著) こころと社会 認知社会心理学への招待 東京大学出版会
- 中村 真・佐藤達哉 1994 a 集団サイズがもたらす認知的バイアスに関する研究：大集団への肯定的評価と、小集団への否定的評価について。日本心理学会第58回大会発表論文集, 159.
- 中村 真・佐藤達哉 1994 b 集団サイズがもたらす認知的バイアスに関する研究Ⅱ：相対的な集団サイズの効果について。日本社会心理学会第35回大会発表論文集
- 中村 真 (投稿中) 認知過程における偏見に関する研究：集団サイズによる認知的バイアス効果
- Park, B. & Rothbart, M. 1982 Perception of out-group homogeneity and levels of social categorization: Memory for the subordinate attributes of in-group and out-group members. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 1051–1068.
- Pettigrew, T. F., Fredrickson, G. M., Glazer, N. & Ueda, R. 1980 *Prejudice*. The Belknap Press of Harvard University Press.
- Sherif, M., White, O. J., Hood, W. E., & Sherif, C. W. 1961 *Intergroup conflict and cooperation: The Robbers cave experiment*. Norman: Institute of Group Relations.
- 白井泰子 1979 ステレオタイプ的判断の認知的基礎—誤った関連づけの認知— 実験社会心理学研究, 19, No. 1, 61–69.
- Snyder, M. & Uranowitz, S. W. 1978 Reconstructing the past: Some cognitive consequences of person perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 941–951.
- Stephan, W. G. 1989 A cognitive approach to stereotyping. In D. Bar-Tal, C. F. Grauman, A. W. Kruglanski & W. Stroebe (Eds.), *Stereotyping and Prejudice: Changing conceptions*. Springer-Verlag. 3–34.
- 杉森伸吉 1990 Illusory Correlation の認知的基礎：成員の好ましさは集団サイズと交互作用している 日本グループ・ダイナミックス学会第38回大会発表論文集(ロングスピーチ), 33–34.
- 杉森伸吉 1993 集団サイズと成員誘意性の顕著性の交互作用—集団サイズ自体の効果— 心理学研究, 64, 16–24.
- Tajfel, H., Billing, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. 1971 Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149–178.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. 1979 An integrative theory of social conflict. In W. Austin & S. Worchsel (Eds.). *The social psychology of intergroup relations*. Mouterey: Books/Cole.
- Tajfel, H. 1981 Human groups and social categories: *Studies in social psychology*. Cambridge: cambridge University Press.
- Tajfel, H. (Ed.) 1982 *Social identity and intergroup relations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tversky, A. & Kahneman, D. 1974 Judgment under uncertainty: Heuristics and biases. *Science*, 185, 1124–1131.
- Weigel, R. H., & Howes, P. W. 1985 Conceptions of racial prejudice: Symbolic racism reconsidered. *Journal of Social Issues*, 41, 117–138.
- Zajonc, R. B. 1968 Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology, Monograph supplement*, 9, 1–29.